

第二章 文明観と擬似植民地的恐怖

一、「活力」としての開化

漱石が、発展至上主義的な考えに入っていたことを理解するためには、漱石の文明観を見なければならない。漱石は、一つの社会の集合意識を「F」と称しながら「開化」とは集合意識がもっとも発現された時代としていた。そして「**Suggestion** ヲ与フル様ニスルガ開化ノ目的ナリ」（「ノート」、開化・文明）と考えていた。

開化ノ目的ハ人工的ニ人間ヲ製造スルニアリ。人工的ニFヲ造ルニアリ人工的ニ**evolution** ヲナスニ有リ決シテ放任主義ニアラズ。**Laissez fair** ニテ **unconscious** ニ**evolve** スルナラバ下等ナル人種ノ事ナリ **intellect** ナキ人類ノ挙ナリ外国ト競争スル必要ナキ人種ノ事ナリ。（同）

ここでまず確認すべきは、漱石は「開化」を決して否定も批判もしてはいないということである。漱石にとって開化とは、「人工的ニ人間ヲ製造スル」ことであり、そのことは「F—社会の集合意識」を「変へ」ることだったのである。それは当然ながら生まれながらの人間にとどまる「放任主義」的な状態ではない。漱石にとって自然のままに放置するのは「下等ナル人種」がすることであり、彼らには「競争」の必要さえない。「**intellect**」な人間ならば「開化」を目指すのは当然のことであり、望ましいことなのである。

今までの、「開化」「文明」を批判した、文明批評家であり「反近代」主義者である漱石像はここでまず修正される必要があるだろう。漱石はむしろ「開化」を肯定的にとらえているのであって、後述するが、漱石が批判したのはあくまでも「外発的な」開化だった。

現時ノFハ欧州ニ尤モ発現ス日本ニ発現スルハソノ後塵ニ過ギズ。既ニ現代ノFヲ知ルニハ日本ダケノFニテハ事足ラズトスレバ我等ハ西洋ニ **accompany** スル速度ヲ以テ追付ク必要アリ是現代ノ **phenomena** ニ齟齬トシテ **suggestion** ヲ作ル余地ナキ所以ナリ。若シ之ヲ知り終ラズシテ **suggestion** ヲナストキハカノ鉄砲ノ発明者ノ如キ愚ヲ見ルニ至るベシ此故ニ現在ノ日本ニハ発明難イシ新説難シ又ハ文芸モ西洋ト同一軌ニ進マネバナラヌトスレバ当分立派ナル文芸ハ出来ル訳ナシ現今ハ追付ク時代ナリ自ラ人ヲ

導ク為ニ新シキ路ヲ切り開クベキ程度ニ達セザレバナリ。(「ノート」、開化・文明)

漱石は、開化を人間活動の必然的な動きとし、むしろ肯定的に見ていた。漱石が気にしていたのは、その「F」が日本においては西洋の「後塵」にしかみえないということである。

それだけでなく、さきに進んだ文明に追付くためには「自ラ考へて物ヲ製シ然ル後之ヲ使用センヨリハ他人の製造セル物ヲ借りテ来ツテ **new environment** ニ応ずるガ軽便」だとしながら、「若シ強情ヲ張ツテ自力ニテコノ **new condition** ニ **adapt** セントスレバ **adapt** シ得る前ニ滅亡ヲ招ク虞」があるし、中国がその例だとも言いながら「若シ **originality** ヲ出サントセバCヨリ進んでDニ追付カザルベカラズ、是目下ノ急務ナリ」(以下の図参照)とも言っている。漱石が漱石が開化に批判的だとすることはもはやできないだろう。

漱石は、「文明」を批判していないだけでなく、むしろ、積極的に追い付くべきと考えていた。そういう点では漱石は文明中心主義にほかならなかったし、だからこそ第一章で述べたような発展至上主義的な考え方もありえたのである。

二、「侵食」への恐怖

そのような漱石がたびたび文明批判と見られてきた発言をしていたのは、その「開化」の力において圧倒的に「西洋」の方が強いと考え、それが日本に入ってくることは力の対決においてまけるようなものだと考えたからである。

若シ西洋日本ノ文明ヲ以テ **degree** ノ差ニシテ **quality** ノ差ニアラズトセバ日本西欧ノ差ハ図ニアラハスガ如シ。若シ **quality** ノ差トスルモ開港以後ハ西洋Fノ為ニ日本ノFハ庄倒セラレ或ハ引キツケラレテ今日ハABノ方向ニヨリ **AC**(殆ンド)ノ方向ニ向ヒ来リタルナリ此ノ方向轉換ハ運命ナリ、**Evolution**ノ **great law** ナリモシABノマヽニテ

進マバ今日日本ヲ見ル、難カラン（略）邦人ノ **suggestion** ヲナシテ現代ノ文明ヲ補ハンニハ C ヲ超エテ D ニ達セザルベカラズ。（「ノート」、開化・文明）

ここには西洋に「圧倒」させられ「引キツケラレ」という、異文化受容を単なる受動的現象とする考えがある。つまり、漱石が「開化」を批判したとしたら、それは受容の態が受身的なものにみえたからなのである。このような、西洋文明の流入＝異文化の受容を「侵食」性のものであると考える認識は漱石テキストに少なからず見いだされる。

今日までは——維新後西洋なるものを知つて以来、西洋との戦争はなかつたのである、然しそれは砲煙弾雨の間に力を角するの戦争はなかつたといふまで、物質上、精神上には平和の戦争は常に為されつゝあつたのである、でこの平和の戦争のために独立も維持される、文明は倍盛んになるといふ有様であつた、これは西洋から輸入された文化の庇陰であつた、が然しこの庇陰を蒙る上から其の報酬として幾分か彼れに侵食される傾向はあつたのである、これは諸事方端がさうであつた、精神界の学問の事は無論として、礼儀、作法、食物、風俗の末に至るまで漸くこれに則るといふやうなことになつた、ツマリ風俗人情の異つた西洋が主となつて来た、即ちこの平和の戦争には敗北した。（「戦後文界の趨勢」、『新小説』、明治38・8）

漱石にはあきらかに「侵食」への恐怖があつたとするべきであろう。実は、西洋文明の移入を「侵食」と考えたのは漱石一人ではない。たとえば陸羯南も「心理的蚕食」というような表現をしていたし、それはむしろ開化期の知識人の共通の理解だつたと言つていい。

歴史は過去を振返つた時始めて生れるものである。悲しいかな今の吾等は刻々に押し流されて、瞬時も一所に徘徊して、吾等が歩いて来た道を顧みる暇を有たない。吾等の過去は存在せざる過去の如くに、未来の為に蹂躪せられつゝある。われらは歴史を有せざる成り上りものゝ如くに、たゞ前へ前へと押されて行く。財力、脳力、体力、道徳力、の非常に懸け隔たつた国民が、鼻と鼻とを突き合せたとき、低い方は急に自己の過去を失つて仕舞ふ。（「マードック先生の日本歴史」下、明治44・3）

「侵食」の考え方の根底には、彼我の能力を「懸け隔たつた」ものと考え、自己のほう

を「低い」とする状況認識がある。そしてそれはおおむね間違っていない。

しかし、ここで確認しておくべきことがさしあたり二つばかりある。まず、「蹂躪」というような被害意識にみちた表現は、入ってくる方の主体の強制性・意図性を表象してしまうということ（それは受け入れる側の抵抗と敵意をあおるだろう）、そしてそのため受け入れる側における自発性や期待、楽しみが捨象されることである。そして、そのような場合には、必ずといっていいほど、抵抗が生じるものだが、そのこともこのような言説は想定していない。「自己の過去を消失」するのではないかというような恐怖心はまさにそのためなのである。

自体我日本は不幸にして、文学の方面に於ては昔から外国に向て誇り得る——誇るに足るべき文学はないと思ふ——或は比較的あるかも知らぬ、然し大きな顔をして世界の舞台に闊歩し得るやうなものは、ドーも見当らない。（「戦後文界の趨勢」）

しかるべきものがまだ「ない」——すなわち対抗できないと思うからこそ恐怖は生じる。他者に出会って、ことごとくつぶされてしまうというような自己消失への恐怖が警戒心を呼び起こすのである。そして、そのような警戒意識が充足されない「誇り」への欲望によるものであることを、すなわち「大きな顔をして世界の舞台に闊歩し得る」ことにへの欲望によるものであることをひとまずここで確認しておこう。

漱石自身の言説が雄弁に語っているように、異文化の出会いの場では必ず抵抗がおこり、その言説は異文化受容への自発的・積極的能動性を忘却・隠蔽し、他者への敵意をあおりたてる。そしてそれこそが、ほかならないナショナリズムの発生装置なのだ。

そこには「守られる」べき純粋な自己への幻想があるのだが、実はそこにあるのは最初からハイブリッドな自己でしかない。たとえ純粋な自己がそこにあったとしても、異文化との接触をとおして強靱になり豊かになる文化の属性が、そこでは考えられていない。

漱石は、「一代における集合意識を大別して三とす。模擬的意識、能才的意識、天才的意識是なり」といって「模擬的意識とは我が焦点の容易に他に支配せらるゝを云ふ」（「文学論」第5編第一章「一代における三種の集合的F」）と語ってもいたが、漱石にとって日本は「模擬的意識」としか見えていなかったのだろう。すでに「明治も四十年になる」のに「まだ沙翁が出ない、まだゲーテが出ない」（『野分』十一）というような焦燥感が「西洋の理想に圧倒せられて目がくらむ日本人はある程度において皆奴隷である」（同十一）とま

で言わせていたのである。

日本ハ西洋に圧迫セラレツヽアル日本ノ領土ハ幸イ安全ナレドモ領土以内ノ物即ち国ヲ構成スル分子ハ日々此圧迫ヲ受けテ領分ヲ減ジツヽアル

有形—**a**、犬。日本ノ犬今殆どナシ

b、日本ノ衣服ハ領分ヲ失シテ官衙其他ニ用ラレズ

c、住居モ段々侵食サレツヽアル

d、飛脚ハナクナルカゴハ御廢シ)

無形—**a**、政治

b、科学

c、哲学

d、道德

e、宗教

f、文学—思想・言語

其他

何（処）迄此ノ圧迫に甘ンズルカ若シ此れニ甘ンズレバ日本は悉ク西洋化セン。（略）
他ノ事ハイザシラズ文芸ノ事ニオイテハ余ハ余ガ日本人トシテ立脚地ヨリ此圧迫ニ反抗セントス。（「ノート」、生存競争）

「圧迫」を語り、それに立ち向かうべきとしている点では先にあげたものと同様の文章といえるが、このノートでも書かれている通り「日本ノ領土」ハ「安全」だったことを確認しておこう。にもかかわらず漱石は「領土内ノ物即ち国ヲ構成スル分子」の被害を想像しており、しかもその思考は「領分ヲ減ジツヽアル」というような、「領土」をめぐる内部の闘いとして展開されていることにも注意しておこう。漱石にとってすでに「日本ノ犬」はなく、「衣服」をも「領分ヲ失」っていて、「住居」の変化も「侵食」以外の何物でもない。漱石自身は西洋の服を楽しんだようだが（イギリス滞在中の日記には白いシャツを含む洋服に関する記述が多く見られる）、そのようなことが漱石の意識に上ることはない。ともかくも漱石はそこで「文学」だけは自分で守ろうとした。そのような意欲こそが、作家「漱石」の誕生を導いたものでもあったのである。

漱石における「西洋」への恐怖、「追隨する日本」への恐怖がもっとも象徴的に現れた作

品は、かの『夢十夜』（『東京朝日新聞』、明治41年7月20日～8月5日）の「第七夜」といえるだろう。そこでは、話者は「大きな船に乗つてゐる」のだが、「何処へ行くんだか分らない」。そして船は「太陽」の「跡を追掛けて行く」のだが「決して追付かない」。「西へ行く」ようだが、よくはわからない。「こんな船にゐるより一層身を投げて死んで仕舞おうかと思つた」話者はついに身を海へなげる。しかし「何処へ行くんだか判らない船でも矢つ張り乗つて居る方がよかつたと始めて悟りながら」「落ちて行つた」という話だった。そこにある恐怖は作家自身のものだったとすべきだろう。

三、「敬服」への欲望

渡英数ヶ月の時点となる明治三十四年に漱石は次のような文章を日記に残している。

西洋人ハ日本ノ進歩ニ驚ク驚クハ今迄輕蔑シテ居ツタ者ガ生意気ナコトヲシタリ云
タリスルノデ驚クナリ大部分ノ者ハ驚キモセネバ知りモセヌナリ真ニ西洋人ヲシテ敬
服セシムルハ何年後ノコトヤラ分ラヌナリ土台日本又ハ日本人ニ一向 **interest** ヲ持テ
オラヌ者多キナリツマラヌ下宿ノ爺杯ガ日本ヲ **appreciate** セヌノミカ心中輕侮ス
ルノ色アルヲ見テ自ラ頻リニ法螺ヲ吹キ己レ及び己レノ国ヲエラソウニ言ヘバ云フ程
向フハ此方ヲ馬鹿ニスルナリ是ハ此方ガ立派ナコトヲ云ツテモ先方ノ知識以上ノコト
ヲ言ヘバー一向通ゼヌノミカ皆之ヲ **conceit** ト見倣セバナリ黙ツテセツヘトヤルベシ。
(明治三十四年一月二十五日付日記)

西洋人が「驚く」のがそれまで「輕蔑」していたからかどうかというのはさておくとしても、ここで確認したいのは漱石が西洋人を「敬服せしむる」ことへの強い欲望をいっていたことである。漱石はたとえば「夜、下宿の三階にてつくへ日本の前途を考ふ。日本は真面目ならざるべからず。日本人の眼はより大ならざるべからず」（明治三十四年一月二七日付日記）というようにたびたび「日本の前途」について考えをめぐらしているのだが、そのような意識もまたこのような「敬服」への欲望と無関係ではない。「大部分の者」が「日本」に「驚きもせねば知りもせぬ」ような状況は漱石をして「法螺を吹」いてでも「己の国をえらさうに云」おうとするような欲望を強化させる。それは一方で「素敵なジャップ」といわれ、「日本を頻りに誉め」（明治三十三年十一月二三日付日記）る西洋人が

いても緩和されることはなかったのである。

「世界の博物館」（「倫敦消息」）としての倫敦において中国人と間違われるような状況の中で、漱石にそのような欲望を起こしているのはむしろ確かな自己主体意識である。そして漱石において自己存在の確かな手応えは、なによりも「日本人」というナショナル・アイデンティティにおいて求められていたのである。

吾等は揮身の氣力を挙げて、吾等が過去を破壊しつゝ、斃れる迄前進するのである。しかも吾等が斃れる時、吾等の烟突が西洋の烟突の如く盛んな烟りを吐き、吾等の汽車が西洋の汽車の如く広い鉄軌を走り、吾等の資本が公債となって西洋に流用せられ、吾等の研究と発明と精神事業が畏敬を以て西洋に迎へらるゝや否やは、どう己惚れても大いなる疑問である。マードック先生が吾等の現在に驚嘆して吾等の過去を研究されると同時に、吾等は吾等の現在から刻々に追ひ捲られて、吾等の未来を斯の如く悲観してゐる。（「マードック先生の日本歴史」下）

前章でみたようにイギリスの「文学美術がいかに盛大で其盛大な文学美術が如何に国民の品性に感化を及ぼしつつあるか」と考えた漱石は、自らも「文学」で立つ決心を抱くようになるのだが、それはひとえに上記の文章に見られるような具体的な野望に支えられてのものだったといえる。漱石の文学活動が、西洋なしにありえなかったとするならば、それはまずそういう意味で言われるべきなのである。西洋を「敬服」させること、そして自らが属する「日本」への誇りをとりもどすこと、それこそが漱石の西洋体験のおみやげだったのである。以後の漱石テキストの多くが「日本」について語っているのもむしろその結果である。それはまた、すでに早い時期に「英語英文に通達して、外国語でえらい文学上の述作をやつて西洋人を驚かせやうといふ」（「時機が来てみたんだ——処女作追懐談」、『文章世界』3巻12号、明治41年9月15日）野望を持っていた漱石と矛盾していない。

「敬服」させたいという屈折した欲望とともに始まったのは、他者と自己を区別する＜差異化＞への運動である。のちに漱石は、文学の「模範は彼に在る、鑑は外国に求られねばならぬといふ、この風潮が深く浸み込んだ。」（「戦後文界の趨勢」）としながら、次のように述べていた。

成程日本には文学としては西洋に向つて誇るに足るものなく、彼は頗る発達して居たかもしれない、然し日本と西洋は凡ての点に於て異つて同じくない、敢て故意に日本を区別するのではなく、事実異つて居る、その異なる国民であれば、一種の文明、一種の歴史といふやうに、日本としての特性を有つて今の世の中に生存して居るので、縦令んばどの位西洋に感服しても、これを国民に紹介するに当つては日本人としての特性を忘れてはならぬので、これを判断するのもその通り日本人としての特性を離れてはならぬ。

(中略) 日本はドコまでも日本である、日本には日本の歴史がある、日本人には日本人の特性がある、あながちに西洋を模倣するといふのはいけぬ、西洋ばかりが模範ではない、我々も模範となり得る、彼に勝てぬということはないと、斯う考へが付て来る。(「戦後文界の趨勢」)

そしてこのような「特殊」への願望は実は漱石自身信じてもいたものである。

たとえば漱石は次のようなメモをのこしている。

文芸ハ疑ヒモナク国民的ナリ世界にアラズ国民ノ思想ニ歴史ヲ有スル以上ハ文芸ニ歴史ナカルベカラズ (「ノート」、**Art is National or Individual**)

日本人ノ頭脳ハ幾百年過去ノ歴史ニテ俳句和歌ヲ味フニ適する様ニ作ラレタルナリ。

(同)

このような考えは、たとえば外国人に日本文学は分からないはずだとの論法へとつながっていくだろう。しかし、そのような「特徴」があったとしてもそれはあくまでも外との交渉がなかったため、変化を経験しなかった結果にすぎない。交渉があるとき混合がおこるのは当然なのであり、そのとき「頭脳」論は崩壊するだろう。逆にいえば、閉じられていたために、そのようなテイストが研ぎ澄まされてきただけの話なのである。

漱石は日本の絵を見ると「わが日本人が如何なる過去を吾々の為に拵へて呉れたかゞ善く分る」(「東洋美術図譜」、『東京朝日新聞』明治43年1月5日)としながら次のようにも語っている。

過去に於て日本人が既に是丈の仕事をして置いてくれたといふ自覚は、未来の発展に少からぬ感化を与へるに違ひない。だから余は喜んで東洋美術図譜を読者に紹介する。

このうちから東洋にのみあつて、西洋の美術には見出し得べからざる特長を観得する事が出来るならば、たとひ其特徴が全体にわたらざる一種の風致にせよ、観得し得た丈それだけ其人の過去を偉大ならしむる訳である。従つて其人の将来を其丈インスパイヤーする訳である。（「東洋美術図譜」）

ここには、個人の芸術を「東洋」や「日本」の名で一様なものとするナショナルな考えがある。ある意味では、「国家」としての連続性を感じるためにこそそのような「差異」の発見が必要だったといえるだろう。

ところで、このような漱石の感情や理解は漱石に限るものではない。

たとえば近代フランスでも同様のことは生じていた。近代初期のフランスでも「特殊性」への欲望に基づく言語と文化の発見は強く求められていたが、その時、言われていたのは、「われわれの国の力となる要素の筆頭に趣味と呼ばれるものがある」「われわれの国を特徴づけ、すべてに適用可能な、この趣味の繊細さを守ろう。大事に守っていこう。趣味はわが国にとり、イギリスの石炭、アメリカあるいはロシアの大資源に代わるもの」（飯島伸二「近代化と言語表現の秩序——十九世紀フランスにおける文学教育」、鹿児島経済大学地域総合研究所篇『近代秩序への接近——制度と心性の諸断面』160頁、日本経済評論社、1999・3）というような言葉だった。フランスは、「石炭」や「資源」というような「物質」よりフランスにのみ存在するはずの「特殊な文化」に誇りを見出そうとしていたのである。

このようなことが起こるのは、むしろそこから誇りをみだし、自己をその構成員として認識したいがためである。たとえばつぎのように。

偉大なる過去を背景に持つてゐる国民は勢ひのある親分を控へた個人と同じ事で、何かに付けて心丈夫である。（略）余は日本人として、神武天皇以来の日本人が、如何なる事業をわが歴史上に発展せるかの大問題を、過去に控へて生息するものである。固より余一人の仕事は、余一人の仕事に違ひないのだから、余一人の意志で成就もし破壊もする積ではあるが、余の過去、——もつと大きく云へば、わが祖先が余の生まれぬ前に残して行つて呉れた過去が、余の仕事の幾分かを既に余の生まれた時に限定して仕舞つた様な心持がする。（「東洋美術図譜」）

しかし、その逆の場合は気持ちは萎縮される。同じ文章の中で漱石は、書齋の本をみながら、つぎのように言っているのである。

其中に詰まつてゐる金文字の名前が悉く西洋語であるのに気が付いて驚いた事がある。今迄は此五彩の眩ゆいうちに身を置いて、少しは得意であつたが、気が付いて見ると、是等は皆異國産の思想を青く綴ぢたり赤く綴ぢたりしたものゝみである。単に所有と云ふ点から云へば聊か富といふ念も起るが、それは親の財産を受継いだ富ではなくつて、他人の家へ養子に行つて、知らぬものから得た財産である。自由に利用するのは養子の権利かも知れないが、こんなものゝ御陰を蒙るのは一人前の男としては気が利かな過ぎると思ふと、有り余る本を四方に積みながら非常に意気地のない心持がした。(「東洋美術図譜」)

いうならば、漱石の差異化への運動は、ひとえに他者と自己を区別し、誇りをみいだそうとする欲望ゆえの運動だったのである。

四、オリエンタリズムとナショナリズムの共謀

ところで、このような漱石の差異化意識の根底には師ケーベルの影響が見られる。ケーベルこそ「純粋の日本」にこだわりつづけ、「フロックコート」や西洋の「靴」を身に付けることを「美的罪惡」としながら『近代文明』のきらきら光る似而非黄金は、彼らによく似合わない」としていた人物で、「私の知る日本の絵画と詩歌のうちで私の好きなのは、その独自性を發揮せる場合である。私の意味するのは無論純然たる日本的芸術であつて、西洋の芸術の不手際なる模倣ではない」(以上「私が見た日本」、『ケーベル博士隨筆集』78—101頁、岩波書店、1928・4、傍点は原文)ということ語っていた。漱石がエッセイ「ケーベル先生」で書いているように、漱石がその言葉から影響を受けたろうことは想像に難くない。

ところで、このケーベルと漱石との一致には看過できない問題がある。

たとえば大野淳一はケーベルと漱石の相違点と影響関係を指摘しながら「ケーベルは、「日本」人のフロックコート姿は痛罵するが、同じ姿の自分を「珍妙」と感じることはもちろんないし、一方西洋と日本を入れ替えてかれが和服を着ることは、はじめから問題に

もならない。それに対して漱石は、同じく「西洋に曳綱に曳かれたる日本」に反発しながら、フロックコートを着て帝国大学で英文学を講ずるのである。これが「喜劇」であるとするれば、この「喜劇」は俳優たちの人格や修養によって回避しうるものではなくなっている。状況自体が「喜劇の時代」（越智治雄）なのである」（注1）としている。

ここには、安心して復古あるいは後退する構造がある。一般に、後進国のものが先進国の風俗を取り入れるのは「模倣」とされるが、逆の場合はそれほど問題とされない。しかし、「模倣」という非難は、その主体が先進国の者ならオリエンタリズムにほかならず、（実際、ケーベルの文章には日本に「子供らしさ」「野性」「牧歌」を見ようとする姿勢が露である）後進国のものによる同じ言説は自己の「純粋」を信ずるナショナリズムを背景にしている。また、そのことを「模倣」と語ることはその主体を「遅れ」たものとする認識による。そして主体意識——抵抗的ナショナリズムは、概して「遅れ」ているとされたものの方に芽生える。

先進国のものが遅れたところの風俗を真似ることはなぜ問題とされないのだろうか。それは、そのことが単なる酔狂・趣向と見られるからである。しかし、先進国のものを真似ることもまた、強制されたものでないかぎり実はひとつの「趣向」にすぎない。むしろその場合帝国主義的進出が伴われるのは多く見られることである。しかし、あらゆる文化は「接触」による融合によって新たなものを産む。しかしそのようなことに気づかなかったからこそ漱石やケーベルのような考えが近代では（現代でも）多かったのである。それは差異としての「西洋」を確定することでもあり、漱石が「西洋」の文学を本質的に「違う」ものと考え、対立し、乗り越えるべき何ものかとして考えたのもそのためとっていい。しかし、「違い」とはあくまでも他者に出会ってはじめて見出されるものである。そして、それを支えるのはむしろ純粋幻想である。しかし、漱石自身、その「言語」においてすでに純粋な「日本語」世界にとどまり得なかった。

文章杯書き候ても日本語でかけば西洋語が無茶苦茶に出て参候。又西洋語にて認め候へばくるしくなりて日本語にし度なり、何とも始末におへぬ代物と相成候。日本に帰り候へば随分の高襟党に有之べく、胸に花を挿して自転車に乗りて御目にかける位は何でもなく候。（明治三十五年十二月一日付高浜虚子宛書簡）

滞在二年弱にして当然のことでもあるのだが、そのことに漱石はストレスを感じてい

る。むろん漱石がそう考えるのは閉じられた純粋な言語体系が存在しうると考えているからである。しかし、原理的に純粋な民族が存在し得ないように、純粋な言語など存在し得ない。そしてそのようなハイブリディティの現場を漱石自身が示しているのだ。漱石はむろんそのことに気づかない。そのような状況を「何とも始末におへぬ代物」と感じたのは、自らが「接触」（酒井直樹）の時代のさなかにいたことを知らなかったゆえのことだったのである。そして以後、その純粋幻想——ハイブリディティの排除は、二十世紀を通して強力な勢いで続くことになる。

注

- 1) 大野淳一「ケーベル先生と漱石」（三好行雄他編『講座夏目漱石第一巻』有斐閣、1981・7）